

# 文芸

## 俳句

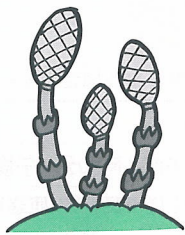
料峭や鍵をさがせば鈴がなり 池田 逸子  
 庭先に鬼の残せし年の豆 伊藤 敬子  
 屋根替えや頭上の夫に指図して 今関満喜子  
 雛人形今日も仕舞えず晴れを待つ 魚地 照子  
 あまりある陽になほ淡し重かな 江森 悦子  
 さよならのあとと長話山笑ふ 川島 通則  
 春の夢あの世此の世の友が居り 向後 寛  
 縄跳びを競い合ふ子等山笑ふ 越川せつ子  
 総の国棚田に響く春の音 小松 藤男  
 理髪屋の回り看板六つの花 佐瀬 輝夫  
 立春の雨に霞める神の山 椎名万里子  
 戻らざる老の繰言山笑う 鈴木とし子  
 山笑ふ里心つき旅なかは 鈴木 利子

梅林や天守閣なき城跡とか 玉虫 栗扇  
 春光を背に受け和む老二人 土屋美枝子  
 寡婦と言ふ横顔さびし針供養 土屋 義昭  
 曲水の流れの後を辿りけり 戸村 静華  
 山笑ふ段だん畑に人の声 西崎さち子  
 又転ぶ稚に下萌やさしかり 藤田 雅夫

## 短歌

縁側に雪あかりする中アザレアの 八角 三枝  
 桃色ひときはやさしく浮きぬ 折るがに体温計の目盛り見る  
 熱の下るをひたに待ちつつ 田崎 尚美  
 入院せし母親に代はり弁当を 孫に手渡す入試の今朝を 鈴木まさ子  
 鋸山の頂上に来て長病める 友に小さきぬいぐるみ買う 青木 秀子  
 並び建つ家の窓より見ゆるらむ 外房千倉の美しき海原 西山満里子

蚯蚓棲む畑となりしを頼もしく けふもひたすら草取り励む 芹川 初子  
 庭の辺にいつも花花咲かせぬし 友は逝きたり春を待たずに 島田ますみ  
 裸木の重なる林を通り抜け 朝陽輝く立春の今日 斉藤つね子  
 遠き日に教へし生徒の幾人が 卒寿お目出度と電話をもらふ  
 ……  
 新聞のズシリと重き広告の 一枚いちまい客呼ぶ声に 越川 義則  
 幸せは手作りならぬ宝物 天与の余生長寿恵まる 伊藤 定男  
 甥の住むシカゴは寒い国と聞く 逢う事はなく空便を待つ 内藤 くに  
 歌一つ作りて今日の思ひ足る 十時のお茶を大声で呼ぶ 高梨 キヨ



## こうほう 博物館 61

### 不思議なえびね

「えびね」という日本固有の野性ランがある。特に東北から九州まで広く分布している地えびねは、春の終わりごろ、薄紫色の約2センチメートルの小さな花を十輪ほど付けた花穂が立ち上がって咲く。

元々はどこにでも生えていた野性ランであったが、その上品さから人気を呼び、乱獲されてほとんど見られなくなった。

そのえびねが、篠本の湿地に生えているというのをI氏から聞いて、にわかには信じられなかった。えびねは元来、山林の水はけの良い斜面地の、木漏れ日が当たるぐらいの明るさの所に生えると言われる。篠本の湿地は、それとは正反対の環境で、水は

「そんな場所にはえびねが生えてははずはない」と思いつつ、同氏から見せていただいたのが、左の写真のえびねである。花の色は薄紫色で、形から見ても地えびねで間違いない。

野性のえびねが生えていただけでも奇跡的なのに、全く逆の環境の中で生えていた不思議なえびねは、貴重であるだけでなくたいへん面白い。

この植物を何とか後世へと保存していきたいものがある。



▶ 篠本湿地で採取されたえびね